

史跡 松代藩主真田家墓所

—宗教法人長国寺庫裏建設に係る現状変更に伴う発掘調査報告書—

1993・3

長野市教育委員会

序

豊かな自然と文化に恵まれた長野市では、この財産を少しでも多く後世に残し伝えるべく、現在180を超える文化財、天然記念物を指定し保護・保存に努めているところでございます。しかし、太古の昔より現在に至るまでこの広大な善光寺平に宮々と続いてきた人々の生活すべてを未来へ残していくことができないことも事実といえます。

ここに長野市の埋蔵文化財第59集として刊行いたします本書は中世以降この善光寺平の中心地として繁栄し、現在においても江戸の面影を各所に残す松代城下町の中に所在する史跡松代藩主真田家墓所内の発掘調査報告書でございます。

墓所は真田家の菩提寺である長国寺に営まれ、その境内に史跡の指定範囲としております。また、この長国寺には、現在長野市教育委員会で整備事業を進めております史跡旧文武学校の中の繪術所建物が庫裏として明治19年に移築されておりました。このたびの発掘調査は繪術所復原整備事業により解体された長国寺庫裏に代わる庫裏の新築にともない実施したものでございます。

事業及び調査にあたって、深いご理解と多大なご支援ご助力いただきました長国寺関係者の皆々様をはじめ、ご指導いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

長野市教育委員会

教育長 奥村 秀雄

例　　言

- 1 本書は、史跡松代藩主真田家墓所指定地内における宗教法人長国寺が施工する庫裏新築事業に係る現状変更に伴う発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助金（50%）、県費補助金（15%）を得て、長野市教育委員会直営で実施し、その期間は平成4年8月17日～8月28日、及び平成5年3月9日（実質11日）である。
- 3 発掘調査実施面積・調査費は、648m²・2,133,000円である。
- 4 調査地の測量は、コーディックシステムを援用して実施し、(株)写真測図研究所に委託した。
- 5 本書作製における執筆分担は次のとおりである。
II章　徳嵩雄司
その他　前島　卓
- 6 調査により得られた諸資料は、長野市教育委員会で保管している。

目　　次

序

例言

I　調査経過	
1　史跡指定	1
2　調査に至る経過	1
3　発掘調査経過	2
4　調査の体制	3
II　歴史的環境	5
III　調　　査	7

挿図目次

図1　史跡指定地及び調査地	1	図4　調査区全体図	8
図2　調査地位置図	4	図5　出土遺物	9
図3　表面採集遺物	7		

I 調査経過

1 史跡指定

「松代藩主真田家墓所は、元和8年(1622)上田城主真田信之が松代城主となり、その後、代々廃藩まで城主をつとめた真田家歴代の墓所である。墓所は真田家の菩提寺である長国寺に営まれている。靈屋はもと初代信之から4代信弘までのものと、3代幸道母松寿院のもの5棟があったが、現在は、初代信之と4代信弘の2棟が残るだけである。2棟の靈屋の南東には別に土塚を通して歴代藩主の墓所があり、初代信之以下12代幸治までの宝篋印塔が並び、初代藩主の墓には石の鳥居がある。靈屋と墓所が一体として遺存しており、江戸時代の大名家墓所を知る上で貴重であり、史跡に指定してその保存を図ろうとするものである。」として、昭和62年12月25日付け文部省告示第139号(官報告示第18256号)により、墓地として使用されている部分を除いた寺域のほぼ全域について史跡の指定を受けた。

2 調査に至る経過

長野市教育委員会では、史跡旧文武学校整備事業の一環として欠落している槍術所の復原整備を計画し、明治19年に長国寺庫裏として移築された槍術所建物を再度旧文武学校へ移築するため、準備をすすめてきた。事業実施にあたっては、現状で庫裏として使用している槍術所建物に代わる新たな庫裏が必要となるため協議を重ねてきたところ、宗教法人長国寺関係者各位をはじめ、文化庁、長野県教育委員会の深いご理解をいただき、平成4

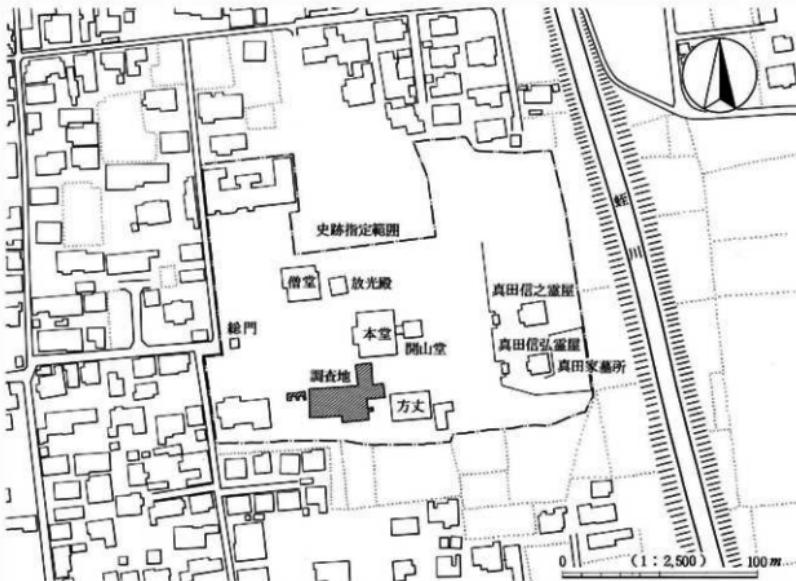


図1 史跡指定地（未実測）及び調査地

年度国庫補助事業として実施のはこびとなった。

平成4年5月8付、旧槍術所建物移築による庫裏及び仮設住宅の建設、建設地の発掘調査について、宗教法人長國寺より文化庁長官宛に文化財保護法第80条第1項に基づく現状変更許可申請書の提出があり、意見を付して長野県教育委員会宛に進達する。

6月11日付、委保4の515号により、「1 工事の着手は、長野市教育委員会による発掘調査の終了後とすること。 2 その他、実施にあたっては、長野県教育委員会の指示を受けること。」の条件を付して現状変更が許可となり、宗教法人長國寺宛に伝達する。

10月30日付、庫裏建設に係る設計変更について、宗教法人長國寺より文化庁長官宛に、特別史跡名称天然記念物又は史跡名称天然記念物の現状変更等の許可申請書に関する規則第3条の規定に基づく現状変更に係る許可申請書記載事項等の変更許可申請書の提出があり、意見を付して長野県教育委員会宛に進達する。

12月8日付、委保4の1220号により、現状変更に係る許可申請書記載事項の変更が許可となり、宗教法人長國寺宛伝達する。

3 発掘調査経過

発掘調査は小範囲ながら、庫裏の設計変更により2次にわたることになった。第1次調査は、建物の解体調査終了を待ち、平成4年8月17日午後より新庫裏及び玄関棟建設予定範囲の表土除去作業を開始し、8月18日午後より遺構検出作業に着手した。調査では、明治5年に焼失したとされる庫裏に関する明瞭な遺構を確認することが出来ず、8月28日で現場作業を終了した。

その後、宗教法人長國寺より回廊部分を増工する意向の打診があり、変更許可を待つとともに、県教育委員会を通じ文化庁と協議の結果、平成4年度事業の中で増工分の調査を実施する事とし、3月9日より2次調査に着手したが、明瞭な遺構を確認することが出来ず、同日を持って調査を終了した。



調査地近景

4 調査の体制

長野市教育委員会の直轄事業として社会教育課及び長野市埋蔵文化財センターにより実施し、その組織は下記のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会 教育長	奥村秀雄
調査機関	長野市教育委員会社会教育課 課長	今井克義
	課長補佐	田中喜昭
		酒井幸雄
長野市埋蔵文化財センター	所長	小山正
	所長補佐	山中武徳
	職員	青木厚子

社会教育課文化財係

係長	徳嵩雄司
主事	前島卓
専門主事	竹内幹雄

埋蔵文化財センター調査係

調査係長	矢口忠良
主査	青木和明
主事	千野浩
主事	飯島哲也

調査参加者 石坂晴美・池田京子・五明志乃・関屋きく・溝端広子・宮原紀夫・柳沢守・山岸元
整理参加者 青木幸子・池田京子・徳成奈於子・中沢元子

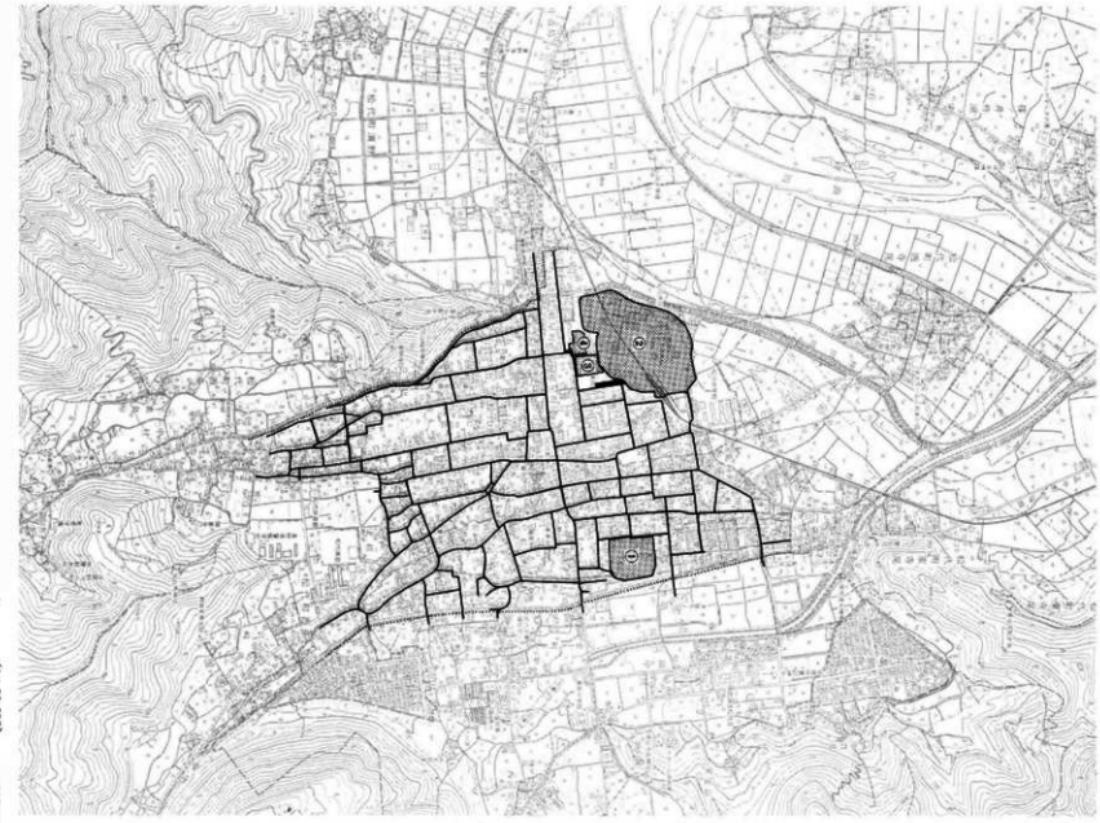
絵図撮影 長野市立博物館 学芸員 山口明

遺構測量委託 南写真測図研究所

調査の実施及び報告書の作成にあたっては、事業主体者である長国寺住職佐橋法龍氏をはじめとする長国寺関係者の方々には、深いご理解と絶大なご協力を賜った。遺物の整理にあたっては、眞長野県埋蔵文化財センター原明芳、市川降之両氏にご指導いただいた。松代城下の絵図面等については真田宝物館降幡浩樹氏、長野市立博物館原田和彦氏よりご教示をいただいた。また、史跡旧文武学校整備事業及び庫裏解体に関わる設計工房番匠、北信土建株式会社、庫裏新築工事に関わる株式会社竹村建築設計事務所、北野建設株式会社からは現場調査においてご協力を賜った。厚く御礼申し上げたい。

1. 長岡寺(調査地)
2. 松代城跡
3. 新御殿跡
4. 旧文武学校

図2 調査地位置図



II 歴史的環境

松代は、南・西・東の三方を山に囲まれ、西・北を千曲川が南から北そして東へと流れる要害の地である。

永禄3年(1560)（一説に天文22年）武田信玄が海津城を築き、高板弾正忠昌信を城代とし、上杉謙信と川中島の戦を重ねつつ、中世からの集落を核に城下の建設を行っていった。築城当時は、本丸に相当する部分の小規模なものであったと推定される。天正6年(1578)昌信没後、その子正貞が海津城の主となるが、天正10年(1582)3月、武田勝頼が織田信長によって滅ぼされると、織田家の家臣森武藏守長可が北信四郡を安堵され海津城に入った。同年6月、本能寺の変で上洛。代わって上杉景勝が信濃に入り、家臣村上景国に守らせた。天正11年上条民部少輔義春、同13年須田相模守満親城将となる。慶長3年(1598)上杉景勝、秀吉の命により、会津へ国替となり「このたび国替について、そのほう家中・侍のことは申すに及ばず、中間・小者に至るまで奉公入たる者一人も残さず召し連れべく候、（略）ただし当田畠を相かかえ年貢沙汰せしめ、検地帳面の相究まる者は、一切召し連れまじく候也」という兵農分離令により、村々に残っていた小領主層の大半が村を捨てた。その後太閤倉入地となり、慶長3年3月田丸中務大輔直昌が海津城にはいった。入封すると直ちに検地を行い、8月に埴科・更級・高井三郡の内4万石を与えられている。土塁を石壁に改めたのは、この時期と言われているが確証は無い。

慶長5年(1600)徳川家康の命により森右近忠政が川中島四郡13万7500石を与えられ入封。城の名を、待城と改めたといわれる。慶長7年、検地を行いその苛酷さに一揆が起こるが鎮圧された。

慶長8年2月、松平上総介忠輝が川中島四郡18万石の領主となって入封。城の名を松城と改めたと言う。幼少だったので佐渡奉行大久保石見守長安を補佐とし、花井遠江守吉成を城代とした。慶長15年、忠輝は越後を合わせて60万石に増封されて高田城に移り、花井吉成を城代として松城においていた。花井は、牟礼駅より稻積村・善光寺村・丹波島村・矢代村・坂木村を経て小県郡に至る道路を新設し、稻積・善光寺・丹波島・矢代等の宿駅を設け、これを北国街道に改めるとともに、旧北国街道の牟礼駅より高井郡福島を経て大室を通り候可峠を越えて東条へ出て地蔵峠を越えて小県郡に至る道を、候可峠を廃して鳥打峠を開き、松城を通り清野、雨宮郡を経て矢代に達する道を開き、これを北国裏街道とした。また、裾花川を改修し、犀川から用水路を引いて川中島平の開発を進めた。慶長18年、花井主水正義雄（吉雄）父没後城代となる。元和2年(1616)主君松平忠輝改易により、罪を得て斬罪となる。元和2年7月、松平伊予守忠昌、川中島12万石を与えられて入封。越後高田城主25万石として移封となり、元和4年4月、高田城主酒井宮内大輔忠勝、松城10万石を与えられ翌5年3月入封した。

元和8年(1622)8月、真田伊豆守信之は4万石を加増され、沼田3万石に川中島10万石を合わせ13万石を与えられ、10月20日松城へ入封した。嫡子信吉に沼田領を、二男信政に松城領を継がせたので、真田家は二家にわかれるが、沼田の真田家は4代で改易となり、松城10万石が世襲され、廃藩になるまでの250年間、10代の藩主が北信濃四郡を支配した。松代城となったのは、真田幸道の正徳元年(1711)という。

城下町の形成を概観すると慶長頃までに町組みの骨格が完成した。当初に計画された城下町の範囲は惣構といわれる外郭土居までと推定される。惣構の南側へ武家屋敷が拡大していくのは、真田氏が入封して新しく屋敷割りが行われた時らしい。城に近い殿町付近に上級武家地を置き、周辺部に中下級武家地を配置する近世城下町の基本的な形がみられる。その後の家臣の移入は、明暦3年(1657)信政が沼田から二代城主として松城に移った時の家臣団、万治元年(1658)柴村に隠居していた信之が没し、従っていた家臣団が城下に戻ってきたもの、天和元年(1681)沼田城主真田信利が改易となり、その家臣が松城城主に仕えたものの3回である。

町人地は、古来からの町八町とよばれる主として街道沿いの地区と、周辺部に町並を形成していった。

長国寺は、藩主真田家の菩提寺として元和8年真田信之が松城へ移封となる際、上田から移された。慶安2年(1649)徳川将軍家より寺領100石の朱印を受け、寛永5年(1628)信濃一国の總禄所となり、元禄6年(1703)から廃藩に至るまで真田家より毎年常法幢料として高200石と薪柴百駄を寄進されている。

明暦4年(1658)3代幸道、2歳で家督を相続すると、前年の江戸大火で江戸城類焼に付き手伝いを仰せ付けられ2万8000両支出、天和2年(1682)高田検地、天和3年日光普請手伝い、元禄3年(1690)高遠検地、元禄13年善光寺焼失、幕命により松代藩で再建にかかり宝永4年(1707)完成、総経費2万594両余。宝永4年富士山噴火につき東海道普請手伝い等多くの課役もあって、財政は逼迫していった。

享保2年(1717)2月、湯本火事により松代城下の大半を焼失し、城も本丸、二の丸、三の丸、櫓門等類焼した。藩財政は窮乏しており、幕府より一万両の借入をし翌年再建した。享保2年4月、関口火事により長国寺類焼し、靈屋と鐘楼を残すのみとなつたが同4年本堂再建、同5年山門を再建した。

寛保2年(1742)8月、戌の満水と呼ばれる大洪水があり、郡奉行が公儀へ届け出た文書によれば、「高六万千六百二十四石三斗五升 今般満水高辻村数百八十二ヶ村」とあり、流家1731軒、流死1220人を数える。松代城下も大被害を受け、城は「御城本丸二丸御殿床上六尺余水損」となり、長国寺は「境内七八尺深く」水没となつた。この後、千曲川の流路変更を計画し、宝曆年間頃まで現在地に移したといわれる。また、神田川、関屋川の流路も変更した。

寛延3年(1750)田村半右衛門、財政再建を強行するが、翌年田村騒動とよばれる一揆により失脚。

宝曆7年(1757)恩田木工民親、藩政改革を始め殖産興業、税の月割納法、半知の廃止等を進めるが、宝曆12年没。明和4年(1767)藩主の居館を本丸の中から花の丸に移した。

文化7年(1810)長国寺立替工事に着手、総門・禅堂・開山堂・衆寮・庫裏等造営した。

弘化4年(1847)善光寺地震と呼ばれる大地震とそれに伴う大洪水にて藩領内の漬家9337戸、死者2695人、城下の漬家175戸、半瀆105戸の大被害を被った。嘉永6年(1853)5月、花の丸御殿全焼。嘉永7年ペリー来航に際し松代藩は小倉藩と共に横浜の警衛を命ぜられる。

安政2年(1855)文武学校を開校。文学・武芸・医学等を教え、洋式砲術の教授訓練には特に力を注いだ。

万延元年(1860)花の丸再建完了。文久3年(1863)新御殿(現在の旧真田邸)完成。

慶応4年(1868)戊辰の役で東山道出兵、信濃十藩の触頭を命ぜられ飯山・北越・会津討伐の官軍に参加し、戰功により明治2年(1869)永世高3万石下賜された。同3年、午札騒動とよばれる一揆が起こる。

明治4年(1871)11月廃藩置県。松代藩は松代県となり、変遷を経て同9年、現在の長野県となり、県庁を長野町に置く。同5年、廃藩により松代城は破却された。同6年、花の丸が放火により焼失した。

長国寺は、明治5年5月15日、本堂屋根より発火し、靈屋5か所・總門・穀倉・宝倉・番部屋それぞれ1か所を残し、本堂・庫裏はかことごとく焼失した。現在の本堂は明治19年の再建で、庫裏の再建には、文武学校の槍術所の部材を使用している。

参考資料

長野県教育委員会 1970『松代町の民家』

長野県編 1973『長野県町村史』北信篇(復刻版) ほか

III 調査

長国寺は、文献資料では元和8年の真田松代移封による造営以来、火災による焼失、老朽化等の要因により3回の造営を行なっており、現在の建物は4期目にあたる。今回の調査は、庫裏及び回廊の新築予定地について行ない、明治5年の火災により作製されたとされる絵図によると庫裏及び回廊跡にあたる。

調査地は、東半部にあたる4期の庫裏が建てられていた部分が他より高まりを持って存在し、重機を援用して表土を剥いだところ、明治5年の火災を裏付けるように火を受けた礎石状の石材、焼土を検出したため、検出面とし調査区全体へ拡張した。西半部の低地部分においては焼土層を検出するには至らなかった。

調査は一部を検出した石材を手道具により露呈すべく作業を進めたが、検出面が小円錐を多量に含むため作業は困難を窺め、変則的ではあるがやむを得ず石材のみを周囲に先立って露出させることとした。

礎石材群

石材はすべて被熱して部分的に剥離しているものの、立柱面としての平坦面を確認することができ、十分な大きさを持っていることから、礎石または束石としての任に十分に耐え得るものと判断された。しかし、2石間隔では1間（田舎間）に近い数値を測るものがあるもののその配置には規則性が無く、多くが横転した状態で遺存していた。覆土には焼土、被熱した円錐、瓦等を多量に含むことから、火災後の整地により3期の庫裏礎石はその旧状を留めていないことを確認するに至った。

また、礎石と判断される石材中1石に、何らかの日付を記したと思われる「年」「十二日」の4文字が2行にわたり朱書きされていることを確認した。

その他

調査区内では、割石による石列4カ所、平面長方形を呈する切石2石による石列1カ所を確認した。割石によ

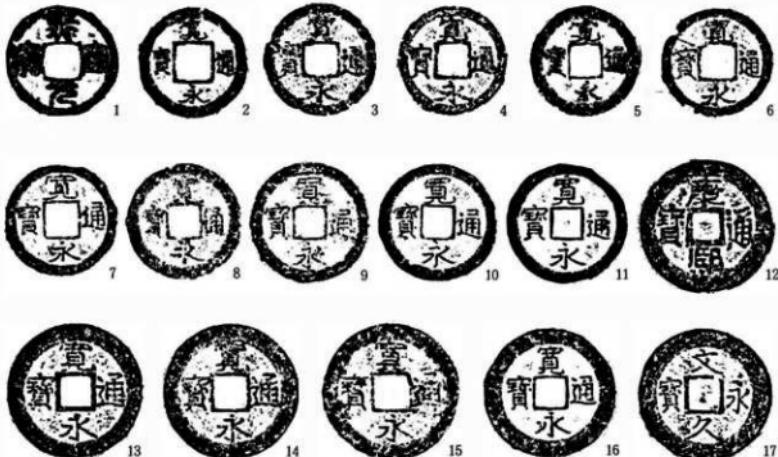


図3 表面採集遺物（長国寺住職松橋法龍氏採集 1:1）

図4 調査区全体図

- 8 -



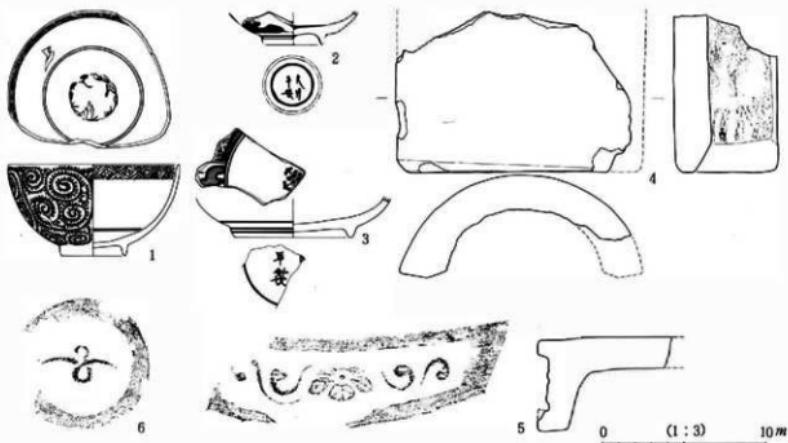


図5 出土遺物

る石列は、4期庫裏の周囲を囲んでいた石積の根石である。被熱痕は確認されない。切石による石列は、整地層上に据えられており、明治5年の火災以後に配置されたものと認められるが、上面には根太跡と思われる黒化部分を残す。

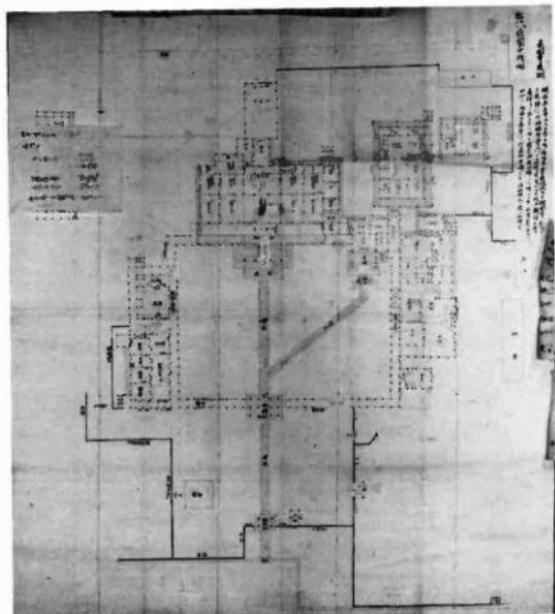
石組溝は、平面長方形を呈する切石を用いて構築されている。石材の多くには被熱による剥離が観察され、根太痕と思われる黒化部分を残すものもあることから、礎石からの転用と考えることも可能であろう。石組溝南側には小蹠群を検出した。石の大きさは拳大からそれ以下で、その西端は現在機能している水路により切られる。また、調査区のほぼ中央には、平面長方形を呈する切石を「コ」字形に配置する不明造構、それに接して欠損しているものの中央をくりぬくように加工した流し台を想定する石製品を検出した。それぞれの造構にともなう遺物の出土は認めらず、時期性格共に明らかではないが3期庫裏に比べ非常に小規模になる4期庫裏の周囲に位置することから4期庫裏に伴うかそれ以降のものと想定しておきたい。しかし、それぞれに使用されている切石の一部については明治5年の火災により焼失した建物の礎石を転用している可能性が高く、礎石材群とした自然石または一部を加工した単独礎石と、切石による延石礎石との2種の礎石構造が存在していたことが想定できる。

遺物（図3・5）

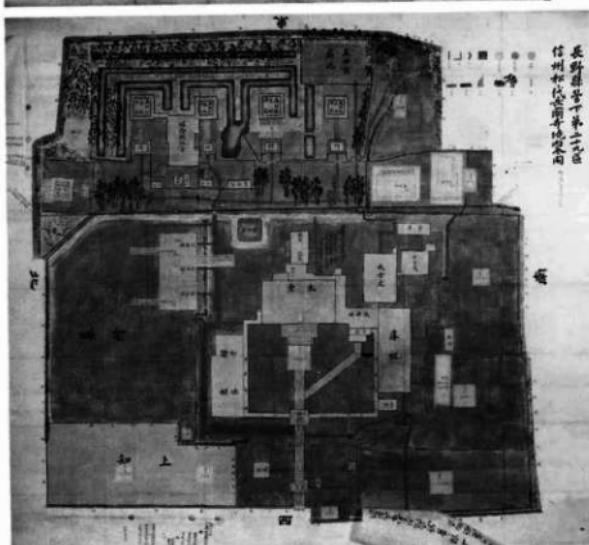
出土遺物は整地層中に含まれる陶磁器、瓦、その上層の陶磁器が大部分を占める。図5にその代表的なもののみ図示した。1～3は磁器で、1は外面にたこ唐草文、見込に松竹梅円文、2、3は高台に「太化年製」の銘、3は見込に筆書きの五弁花文をそれぞれ持ち、18世紀後半の伊万里の特徴を示す。その他多くの陶磁器は明治以降に位置付けられ、3期の庫裏に伴う可能性のある陶磁器はごく少数である。器種は、香炉などはほとんどなくその多くが1～3のように日常雑器類であり、庫裏跡であることを象徴する。

4・5は軒棟瓦で、軒丸部に真田家の家紋である雁金を持つ四葉唐草文を文様とする。5・6の色調は橙褐色を呈すが、一部に黒灰色部分を残しており、火災による2次焼成により変色したものと見られる。

今回の調査では平瓦の出土はなく図示したように棟瓦と丸瓦であり、3期庫裏は、棟瓦葺きに丸瓦を伏せた降り棟を持つ屋根であったことが想定される。



松代長國寺絵図（長國寺蔵）



長野縣管下第二十九区
信州松代長國寺境内全図

（長國寺蔵）



調査区全景（東より）



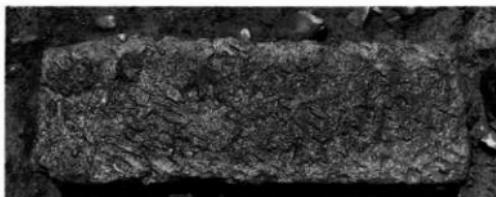
調査区全景（北より）



整地層断面



礎 石



礎 石



山門跡・現本堂

長野市の埋蔵文化財第59集

史跡 松代藩主真田家墓所

平成5年3月15日 印刷

平成5年3月22日 発行

編集発行 長野市教育委員会

印刷 有限会社小池印刷